

憧れと子どもの学び

京都女子大学教授 吉永よしなが 幸司こうし

子どもが飛躍し、学習意欲を燃やすときのエネルギーになるもの一つに「憧れ」がある。憧れの対象は人であったり物であったりさまざまであるが、学ぶ力に及ぼす影響は大きい。憧れという視点で子どもを見守ったり指導を工夫することは楽しい仕事である。

一 友達によさに見習いたいという憧れ

敏夫君（仮名・六年）は言動が荒く、少し気に入らないうとだれ彼なく当たり散らすので、仲間から少し距離を置かれているという存在であった。その敏夫君に注意し、意見を言える子がいた。拓也君（仮名）である。例えば、敏夫君がいたずらをしたり粗暴な言葉を吐いたりするとき、拓也君と目が合うと素直にやめることは珍しくなかった。敏夫君の言葉で言えば、拓也君に一目置いている

理由は、

「拓ちゃんにはかなわん。あいつはよく本を読んでいる。」であった。拓也君は読書が好きで、すでに中学生が読むような難しい文庫本を手にして、時間を見つけて読んでいた。敏夫君にはそれが格好よく見えていたのである。あるとき、拓也君は自分が読んだ本を敏夫君に手渡し、

「本を読まないよ、いい考えはもてないよ。」

と励ました。その言葉が響いたのか、その日以来、読書をする敏夫君の姿を見かけることが多くなった。

卒業間近には、敏夫君を避ける子が少なくなっただけでなく、好かれる子へ成長していた。本を読む友達への憧れが少年の生き方を変えた出来事として心に残っている。

二 自分が納得するよいものを作りたいという憧れ

「物語を作ろう」（六年）という単元を考えたいことがあった。既習、未習の複数以上の物語文教材を束にして扱うという荒っぽい試みであった。単元名は「物語の研究」。研究という言葉が快く響いたらしい。選んできた物語を比べたり内容を読み味わったりして、進んで学習に取り組み子どもの姿が時間を追って増えていった。なかには、この勉強がおもしろいという理由を次のように述べる子がいた。

「物語をいろいろ読んでみると、作者がよく考えて作っているところがわかってきた。自分も作りたいと思うお話を納得できるところまでがんばりたい。」

こう述べた子は、題名を比べたり、最初の場面の作り方や最終場面との関係を考えたり、登場人物の役割に特徴をもたせるなど、多様な視点で物語のイメージを作っていた。また、通常の読解中心の学習であったら、一つ一つ解説しても理解できないような物語の構成要素を、自分の必要に応じて考える子もあった。

よい物語を作りたい、自分が納得できる作品にしたいという憧れをどの子も共通してもっていた授業として心に残っている。

三 美しい文や語句を知りたい、学びたいという憧れ

教材「やまなし」を指導したときのこと。のめり込むほど教材研究をして授業に臨んだ。しかし、期待するような答えが返ってこないのので、いろいろしながら授業を進めていた。その悩みを先輩に訴えたところ、

「そんな難しいことを説明するのではなく、上手に書いてある文や美しい語を見つけてさせたり、このような文章はとても思いつかないというような文を見つけてさせたほうが育つよ。」と教えてもらったことがあった。そこで、先輩の指示どおり実践したところ、それまでは授業に入り込むのをためらっていた子が、文章の細部にまで目を配って読むようになった。

『青く暗く鋼のように』という書き方がすごい。」

『つとと銀の色の腹をひるがえして』という文が好き。など、今まで見逃していたり、難しいと避けたりしていた文や文章に積極的にかかわるようになる姿が際立った。さらに、美しい語や文を写す、覚えるという学習へと発展した。その後、

「宮沢賢治さんはすごい。ほかの本も読みたい。」

と、本を探しに図書室へ足を運ぶ子も出てきた。

美しい語や文章に出会うことの快さが憧れになり、次の学習行動を引き起こした授業であった。